

珈琲動向 Vol. 14

1. 相場見通し ー

10 月初旬にはブラジルでの生産量の下方修正報告が相次いだ一方で、同国産地で順調な降雨が確認されたこともあり、コーヒー先物 NY 相場は方向性を欠き、210-230 セントのボックス圏内で推移しました。

その後、Cecafe（ブラジル輸出業者協会）から、ブラジル貨物の輸出量増加が報告され、景気減退による需要後退懸念も相まって急落 200 セントを切り、現在は 170-180 セント付近で推移しています。

相場を大きく左右する要因であるブラジルの天候は 9 月下旬から 10 月にかけて潤沢な降雨が確認されており、懸念されていた早魃懸念は、一旦は後退しています。

直近では同国での輸出量増加が報告されたことや、逆ザヤであった Dec-Mar の Spread が縮小傾向にあることから、手前の供給不安に関しても解消に向かっていると推察できます。

また需要サイドは、世界的なインフレ進行による物価上昇が継続していることから、嗜好品であるコーヒー需要減退懸念が広がっている状況です。

供給サイドでは供給不足懸念が解消されつつある一方で、需要サイドでは需要減退懸念が広がっており、その需給バランスの崩れが相場下落の一因となっています。

相場急落を横目に需給バランスの指標の一つである NY 認証在庫は引き続き取り崩されており、現在は 40 万袋を割っている状況です。

一方で、これからブラジルの Semi washed とホンジュラスの New crop の到着が見込まれていることと、上述の通り、手前の供給も問題ないとの見方が広がっていることから、認証在庫の原料は相場の材料となっていないことが予想されます。

短期的にみるとブラジルからの供給状況と世界の景気動向を材料とした需要動向でボックス圏の動きが予想される相場ではあるが、中長期的には豊作が期待されるブラジルの 23/24Crop の生産量動向が実際に見え始めた段階で相場が大きく動くことが予想されます。

ブラジル：

産地の天候につき、9 月の月間降雨量は例年を上回る形となり、10 月上旬も引き続き順調な降雨が確認されました。

9 月 11 日から 18 日にかけては、一部の地域で降雨が確認されなかったものの、19 日以降は降雨が戻り、今のところ天候懸念も生じていない状況。

Minas Gerais 州の一部エリアでは 9 月に前年同月比 203% の十分な降雨量（月間 100mm 超）が観測され、22 年 10 月より 23 年 4 月にかけては、更なる月間 150mm

以上の降雨が望ましく、引き続き降雨量に注意していきます。

同国農業コンサルである SAFRAS & Mercafo は同月 21 日にブラジル 22/23 クロップの生産量予想の修正 発表を行いました。

同社の当初予想生産数量は 6110 万袋であったが、9 月には 5820 万袋に下方修正し、更に今回の発表で 5730 万袋（アラビカ : 3460 万袋、コニロン 2270 万袋）まで修正しました。

前月に引き続き、各社相次いで生産量予想の下方修正を行っている一方で、ブラジル輸出業者協会である Cecafe からは、9 月の同国輸出货量が 300 万袋を超え（約 340 万袋）、前年同月比で 4.5%増加していることが発表されました。

この発表を踏まえて、当初懸念されていたほど同国 22/23 クロップ生産量は落ち込まないとの見方が広がり、相場下落の一因となりました。

（為替関連/その他）

10 月 2 日に行われた同国大統領選では、当選に必要な有効投票の 50%超の票を獲得した候補者がいなかった為、同月 30 日に決選投票が行われることとなりました。

事前の世論調査では、左派のルラ元大統領が右派の ボルソナロ現大統領を大きくリードし、優勢とされていたものの、開票結果はルラ氏の得票率が 48.43%、ボルソナロ氏が 43.20%と、ボルソナロ氏が善戦しました。

また、同日に実施された連邦議会選では、上下院ともに最多議席を獲得したのはボルソナロ氏の所属党であり、このままルラ氏が決選投票で勝利したとしても、議会と対立する構図となる可能性が高く、決選投票の結果だけでなく、11 月以降の政治動向についても注視していきました。

9 月の同国消費者物価指数は前年同月比で 7.17%上昇しており、2 カ月連続の 1 ケタ台の上昇率となりました。

ボルソナロ政権による、燃料や電力にかかる商品流通サービス税の税率引き下げ、原油価格の低下が寄与し、インフレ率が下落基調に転じています。

コロンビア

コロンビアでは徐々にメインクロップの収穫が各地で本格化してきており、現在収穫の進捗率は 25%程度 であります。

最新のクロップ調査によるとメインクロップの生産量は 620~640 万袋と予想されており、昨年よりも 2~5%減となる見込みです。

農園管理はしっかりと行われており、さび病やその他病虫害の影響も軽微のため、昨年同様品質については現状、特段の懸念材料はありません。

但し、当初雨が弱まると見込まれていた 10-11 月であったが、現在産地では強い雨が続き、特に Antioquia 県やその他中南部地域が影響を受けています。

収穫期の強い雨は収穫ペースを遅らせるだけでなく、農家での精選行程に遅れを及ぼし、

最終的に品質 劣化につながる可能性があるので、今後もしばらくは品質に対する懸念はぬぐえないと思われます。

また、天候不良によりリノベーションの進捗が思うように進まず、2022 年の植え替え面積は昨対比で 25%減少する予想。

加えて肥料価格の高騰により、2022 年の施肥量は昨対比で約 20%減少する見通しです。結果として 2022 年の単収は 18~18.5 袋/Ha と昨対比で約 5-8%減となる見込み。今後も天候不良、生産コストの上昇が続けば 生産量の回復には時間がかかると考えられ、引き続き複数要因の動向を慎重に見ていく必要があります。

グアテマラ

(コロナ関連) → 感染者：1,138,242 人、死亡者数：19,878 人 (2022 年 10 月 27 日時点) ピーク時よりは沈静化に向かっており、感染者も微増。

(産地関連)

主要産地では潤沢な降雨がみられており、コーヒーチェリーの生育は順調に進んでいます。長雨の影響もあり収穫開始はやや遅れ気味。

ピークは 1 月頃を予定しています。

近年、サビ病の発生は抑制できていたが、22/23crop に関しては多雨、また曇りの日が多いことが 影響し日照不足による農園の湿度上昇等もあり、今後サビ病の発生が懸念されています。

21/22CROP では、コバン地区にて「さび病」が例年以上に発生。

21/22CROP (21 年 10 月 22 年 4 月収穫物) は、おおよそ 360 万袋 (60kg 麻袋換算) との報告が上がっており、ほぼ例年通りの数字となりました。但し、主要地に植えられている木は、樹齢 15 年以上のものが多く、今後徐々に生産量が減少していくことが予測されることから植え替えが必要な時期になっています。

比較的若い木が植えられている地域は「ウエウエテナンゴ」

1ha 当たりの生産量は、ウエウエテナンゴで 18 袋程度。

他エリアでは、9~13 袋程度です。

22/23CROP は、エリアによる増減はあるものの、ほぼ例年通りの 350~360 万袋を見込んでいます。

インドネシア

アチェではメインクロップの収穫が行われており、生産/収穫は順調であるものの、同エリアでの生産量は同年同月比で約 5%減と若干の減算を見込んでおります。

北スマトラでも、同様に現在メインクロップの収穫を迎えておりますが、生産量は前年同月比で、約 10%の大幅減を見込んでおります。

北スマトラでは、生産量の減少が顕著であり、ここ数年で生産量は 43 万袋→22 万袋とお

およそ半分にまで落ち込んでいます。

同国のアラビカについては、4年前の生産量は130万袋であったのに対し、現在の生産量は約83万袋までに落ち込んでおり、総じて減産傾向にあります。

特に「アチェ地区」では、高齢な樹木が多く、収量が下がっていることと、他オリジン同様に後継者問題も深刻になっているようで、産地として供給体制が十分に整っていないことが推察されます。

直近でも、産地価格が激しく変動していましたが、近い将来、供給不足/需要過多となり産地価格がさらに高騰する可能性も危惧されます。

パプアニューギニア

アジアアラビカにおいて一定量の生産量を誇り、日本でもその需要が高まりつつあるパプアニューギニアのコーヒー基本情報を紹介させていただきます。

同国には、800万人ほどが居住し、その8割以上が農業に従事している農業国であり、そのメインの1つがコーヒーです。

収穫は6~7月がメインで、11月~12月のサブの2回に分けられており、生産量の大半が水洗式です。

また、農園面積が0.3~0.5ha程度の小農家が多く、その割合は農家全体の85%を占めています。

小農家が多いゆえに、相場動向によって生産量が左右される状況であり、2016年は100万袋超えの生産量を誇っていたものの、2020年には低相場の影響を受けて、コーヒー生産をやめる農家も多く、生産量は65万袋まで落ち込みました。

ここ1年半の相場高の影響により生産量はやや増加傾向にあり、2021年土は76万袋まで回復しており、現在では汎用性のあるコーヒーのみならず、スペシャルティコーヒーの生産も盛んになってきております。

エチオピア

現地治安状況の報告です。

10月25日、南アフリカにてアフリカ連合(AU)主導により連邦政府代表とティグライ人民解放戦線(TPLF)との会談がようやく始まりました。

現時点では交渉結果に関する情報を待っている状況です。

会談は元ナイジェリア大統領、元ケニア大統領、元南アフリカ副大統領が主導し、米国と国連も加わっての対話努力が行われている模様も、両陣営の確固たる立場とティグライでの継続的な戦闘の中で、交渉が今後数日で和平合意に至る可能性は低いと見られております。

TPLFは連邦軍のティグレイ州全域からの撤退、ティグレイ州への銀行と電気・通信サービス等のインフラ再開を要求も、連邦政府はティグレイ西部をアムハラの一部と主張する

アムハラ州への配慮、さらに連邦当局は資金アクセスへの懸念から公共サービスの復旧にも消極的であり、TPLF の降伏を求め続けております。

加えて、停戦の呼びかけにもかかわらず、連邦政府はここ数週間でティグライ州の州都メケレに通じる道路沿いに位置する複数の町を掌握する等、戦闘が継続されていると報道されており、この軍事的な優位性も連邦政府の強気な交渉は変わらないと見られております

終わりに

10/12₁ (水) ~14 (金) の 3 日間で実施されました「SCAJ2022」におきまして、ブースに多くのお客様が足をお運び頂き、ご挨拶させて頂きました。

この場をお借りして再度御礼申し上げます。

大盛況のうちに終了した SCAJ2022 ですが、今年に来場者は 3 日間合計で 44,052 名と昨年 (19,334 名) の約 2.28 倍で過去最多となったそうです。

この数年間、想定外の状況下で、苦戦された方々、新たなチャネルを見出し、事業拡大された方々、様々なお話を頂きました。

前述の産地事情に加えて、歴史的な円安により、まだまだ不安視されることも多いかと存じますが、2022 年も残すところあと 2 か月となりました。

年末商戦も控え、気候の変動も激しくなる時期ではございますので、健康に留意しつつ乗り切ってまいりましょう。